
IS(インフィニット・ストラトス) ～何というチート人生～

メフィスン

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

インフィニット・ストラトス

IS 〽何というチート人生〽

【Nコード】

N2188Z

【作者名】

メフィスン

【あらすじ】

俺の名前は久遠 龍二。目を覚ますとそこは見知らぬ場所だったんだ。しかもいきなり神様が現れて……俺の人生どうなるの！？この小説はオリ主が一夏ラウ…アーズのキャラとイチャイチャする、そんな話です。あと、オリ主はチートです。それは断言できます。

始まりは突然（前書き）

あの……… すいません！もう片方が全く書けていないのに新作始めちゃって………

けど、頑張って行きますので……… よろしく願いします！

始まりは突然

「……………ここ、何処だ？」

目が覚めると全く知らない場所に居ました。いや、俺はこんなところに来た覚えは無い。そうこう考えていたら、

「おお、目が覚めたか」

「うおっ！？だ、誰だよ！」

目の前に変なじいさんが現れた。いや、何だよこれ！夢か、夢なんだよな！

「違うぞ、夢ではない……………僕はお主から神と崇められとる者じゃ」

「はあ？か、神が何で俺の目の前に居るんだ？……………ってか心読むな！」

「おお、すまんすまん。しかしな、急ぎの用があるんじゃ」

「俺も学校があるんだよ！早くしてくれ！」

そう、俺は高校生なんだ。だから早くしないと学校に遅れる！

「ああ、その話なんじゃが……………お主、行かんでいいぞ。というか、行けん」

「……………はい？」

突然何だよ！自称神が現れたかと思うと学校に行けないって……………どういうこと？

「すまん、儂らのミスでお主を死なせてしまったのじゃ」
「何！？つーか、お前らの責任かぁ！！」

いきなり死の宣告来ました。って何で死んだんだっけ？……………ああ、
そっぴゃ通り魔に刺されたんだっけ……………

「すまんって言うてるであろう。だから責任を取って転生させてやる。ただし、元の世界は無理じゃぞ？」

「……………転生？それって、小説の世界とかも行けるのか？」

「儂の手にかかれば何処でも行けるわい！」

いや、胸を張られても……………つか、それなら……………戦争とかは無し
だな。すぐ殺されちまうもんな。

「それなら問題無い！お詫びにお主の願いをいくつか聞いてやる」
「それマジか！？」

なんか話がいい方向に？まあいいか。

「それでは、戦争が起こっている世界でいいのか？」

「いやいやいや！そんな事無いですよ！」

「……………変わり身が早い。それじゃあ、何処がいいのじゃ？」

うーん……………仮面ライダー好きだったからなあ、そこでもいいけど……………
…ここはあえて、

「ISの世界でお願いします！」

「IS……………？はて、どんな世界じゃったか……………」

「えっと、インフィニット・ストラトス……………だったような」

「ああ、あれか。分かった……それでお主の願いは？」

ふっふっふっ、これで俺はハーレムの中に……

「とりあえず、男のまま転生がいいです」

「了解した。……っという事は、ISに乗る才能もいるな？」

「はい！お願いします！」

「いいんじゃない、俺の責任だからな……後は何がいいかの？」

「えっと、素手でISと戦える身体能力は……いけますかね？」

「むむっ、何故そんな能力が……ああ、なるほどな……分かった」

俺の心を読んだが、俺も良く考えて無かったんだが……まあ、いいか。

「それで、後は何かあるかな？」

「ええっと……専用機が欲しいんですけど」

「任せい！俺の手にかかれば最強の専用機を用意してやる！」

ん……？急に張り切ったぞ、そういうの得意なのか？

「ああそうなんじゃよ」俺はそういうの作るの大好きなんじゃ」それでどうなのがいいのじゃ？」

また心読んでる……

「えっとですね……平成仮面ライダーに変形できるISがいいんですけど……」

「なぬ？……それは、何だ、あの……サブライダーもなのか？」

目を光らせてこっちを見ないで欲しい。

「えっと、出来たらそうして欲しいなあって……」

「任せい！それくらい無いとつまらん！それで、カブトとかのじやが……どうすればいいんじゃない？」

「どうすれば、というと？」

「ベルトに装着されたまま、か……原作通り自律稼働させるのかなのじゃが」

「もちろん、後者で！えっと、よろしければ、キバとかもそれでいけるでしょうか？」

「むむっ、任せよ！……久しぶりに楽しめそうじゃ……（ボソッ）」

ん？今楽しめそうとかなんとか……

「おっと、話がずれたの……それじゃあ、お主が目覚めたら……そうだな、IS学園入学1週間前のあたりになっておる」

「あ、ありがとうございます」

「いいんじゃない、気にするな。……それとだな、お主は篠ノ之 束と生活しとるようになっておる」

「……はい？」

「あのじゃな、お主は篠ノ之 束と共に生活をしとるという事になつとる。そうすれば、専用機持つとる理由にもなるじゃろ？」

ああ、なるほどなあ………ただどあの人かあ………

「まあ、気にするな。チート、というんじゃないか？そんな機体を持てるのじゃからな」

「ま、まあそうですけど……」

「よし、そうとなれば出発じゃ。ISは後から送るからの！」

そう神が言つと、俺の意識が遠ざかっていった。

始まりは突然（後書き）

感想、批判などございましたら、感想にお書きください。

オリジナル主人公 & a m p ; I S 設定

名前… 久遠 龍二（くどう りゅうじ）

年齢… 15 歳

身長… 169 c m

体重… 68 k g

容姿… 黒髪で肩まで伸ばしている。目は両方とも黒。だが、電王を使用している場合はそのフォームに合わせた色になる。

性格… 周りをよく笑わせる陽気な性格。だが、試合などには真剣に取り組む。

備考… 篠ノ乃 束とは共に暮らしていたため、仲が良い。また、I S 学園に来るまでは、束の研究を手伝っていたため、I S の知識は大体頭の中に入っている。

I S の設定

I S 名… オールドライバー

能力… 平成の仮面ライダー全てに変形をすることができる。また、タツロットや、カブトゼクターなどは、龍二の意思で呼び出せる。キバットバット三世は常に龍二の側に飛んでおり、クラス全員が存在を知っている。また、戦闘にアドバイスをしてくれる、オペレーター の役割も果たしている。

また、飛ぶ事は基本出来ない。

待機形態は、腕時計型のデイクイドライバー。

オリジナル主人公 & amp; i S 設定（後書き）

..... 原作を知らないバカですが、頑張ります.....

東さん登場と黒歴史とIS学園入学

「……………ん……………うくん……………りゅーくん！」

「ん……………ここ、は……………？」

誰かが俺の名前を呼んでいる気がした、っていうか絶対呼んでいたのだが、ここがどこなのか分からん。

「りゅーくん♪ やつと起きたんだね♪」

「……………東さん……………？」

「そつだよ♪ おはよう、りゅーくん！」

名前を呼んでいる方を向くと……………篠ノ乃東が立っていた。そして俺が起きたのに気づくと抱きついてきた。嬉しいんだけど……………息が、息が！

「おい東、龍二が苦しそうにしてるぞ？」

「え？つて、あー！りゅーくん大丈夫かい！？」

「いち、おう……………？」

誰かが注意してくれたみたいなんだが……………あの声どつかで聞いたよ
うな……………

あゝそんなことより空気うめー！

「りゅーくん、朝ご飯だからね♪ 早く降りてこないと東さんが全部
食べちゃうぞっ」

そう言つて部屋から出ていく東……………さん。一応年下だしなあ、『さ
ん』付けはしないよね！

「おい龍二！聞こえてるか？」
「ん、ああ……………ってキバット!？」

声のした方を向くと、キバットバット三世が飛んでいた。いやいや、おかしいだろ!？っていうか……………

「ここって何処なんだ？」

「神の説明聞いてなかったのか？さっきの奴、篠ノ乃束の家だ。つっても、即席だけだな」

「ってか、お前は何なんだ？ISは後で届くって……………」

そう、神は後で届くと言っていた。だけど、キバットがいりや変身出来るぞ!？

「ああ、その事だが……………」

「りゅーくん早くうゝ!」

「……………後で聞く」

下から束さんが俺を呼んでいる。確かに腹減ったな……………

「まずは腹ごしらえ、ってか？」

「はは、わかってんなら行こうぜ!」

キバットを連れて、部屋を出る。下に行くって言っても……………どの階段だ？

適当に行きや分かるだろ……………これでいいや。

「おお、りゅーくん流石だねえ、束さんの居場所が分かるなんて……………」

「いや……………適当つすよ……………」

「だな、近くの階段を適当に選んでたもんなゝ!」

「お前、ちょ!」

キバットがいらぬ事を言いやがった……

「ありや、そうなの？ 束さん残念だねえ……ま、いいや。早くご飯食べちゃおう」

「あ、はい！」

そんでテーブル見たんだが……え、何コレ？ テーブルに並んでたのは、和、洋、中三食がそれぞれ並んでいた。ってか朝からへビーすぎる……唐揚げとか、スパゲッティとか……

「早く食べてね！ 束さんこの後用事があるから」

「用事、ですか？」

「そうだよ。それもりゅーくんに関係してる、大切な用事だよ？ 言わなかったつけ？」

何だろう……俺に関する用事……？

聞いた方が早いよな……面倒くさいけど、聞くか……お、唐揚げ美味しい！

「あの、束さん？ 用事って何ですか？」

「えつとねえ、りゅーくんがIS使えるよーって、世界に教えるの！」

「……はい？」

束さんの言ったことに、キバットと俺が気の抜けた返事をする。え？ まだ誰も知らなかったの？……まあ、いいんじゃない？

「それで、どうやって教えるんですか？」

「もちろん、TVだよ」

「……えつと、もしかして……」

当たりたくない予想が頭に浮かんでしまった……

「うん、テレビ局全部ジャックして、会見をするんだ」あ、もちろん、キツくんもだよ」

「はあああああ！？」

「あつはは……って俺も出るのかよ！？」

予想的中……上がり症の俺にそれはきついんだが………つとか、キバット出していいのか？つと聞いてみると、

「何とかなるよ」

何ともならねえええええ！！

酷いなあ、犠牲が増えたぞ……

まあ、いいか。一人より、二人の方がいいしな……

~~~~~

今はIS学園の入学式だ。前では校長が何か言ってるが、興味ない。え？会見はどうなったって？……聞かないでくれ。思いだしたくも無い……あの悪夢だけは……

そんなこんなでIS学園に入る事となった俺だが……居たよ、あいつが。

そう、もう一人男でISを起動出来る男、織斑一夏だ。つて言うか、真横だからね！？わからない方がおかしいよ！？あつ

ちは気付いて無さそうだし……………ああ、キバットは念のためカバンに入ってもらった。だって、喋られても困るし……………

『おい！お前、早く出せつての！』

『おいおい、プライベートチャネル個人秘匿通信で話すことか？つーか、今入学式…分かるか？』

『……………ま、まあ分かるけどよぉ！』

うるさいな、キバットは。つーかダメだろ、確かに会見の時、俺と一緒に出てたけど……………ちなみにベルトだけ部分展開してるんだ。ディエンドだからデザインが……………まあ、大丈夫だろ。

おっと、そんな事を考えてると話が終わったようだ。教室に早く行きたい……………あ、行けるのか。

## 束さん登場と黒歴史とIS学園入学（後書き）

えっと……こっちの方が人気がみたいなので、とりあえず更新。

**Kの暴走／話は全く進まない（前書き）**

タイトル通りです………… or z

## Kの暴走／話は全く進まない

「はあ……」

皆さんの視線が…凄い！一夏はこれに耐えてたのか…俺、無理かも…けど、せつかく転生させてもらったんだし、頑張らねば！目の前の一夏も頑張ってる…って、前の席一夏かよ！

「皆さん入学おめでとう、私は副担任の山田麻耶です！」

…沈黙。いやー、視線が本当凄い！背中痛いよー…なんつって。先生困ってるし…いやけど、後ろからも視線凄いし…横からも…死ぬな。うん。

『また死ぬのか？』

『ちょ、キバツト！…あ、そついや…かばんから出してやるうか？』

なんてふざけてみるか。今出したらそつちに集中するだろ。…頑張つて逃げるよ？先生が話をしているが、まあ寮がどうこうって話だろ…気にしない！…

『いいのか！？ラッキー！』

『…はい？皆の注目がお前に来るぞ？』

『そんなこと気にするかよ』早くしろって！』

…アホだ、こいつ。まあ、仕方ないから出してやるか。ばれないようにこそつと…

うおつと…自己紹介の時間か？一夏…呼ばれてるぞ？…そんなこと言わないけど。

「織斑君！織斑一夏君！」

「は、はい！」

あゝあゝ、慌ててるな。つと…キバットの発射準備完了！存分に暴れる！

『おいキバット！いまなら出てよし！』

『よっしゃあ！行くぜ！』

「げえ、関羽！？」

「誰が三国志の英雄だ、馬鹿者」

あ、やべっ！キバット行っちゃだめえ！

「はっはっ！外だ！久しぶりの外だっ！」

「っはあ！？」

「何だ、こいつは？」

あゝ、千冬さんだめっ！俺のキバットがあ！そう思うと後は早い。急いで俺はキバットを掴み、机の中に放り込む。少し痛いかもしれないけど、死ぬよりはましだ！

「おい久遠、今のはなんだ？」

「あゝ…俺のパートナー、みたいなのですよ…」

千冬さんの目つき怖すぎる…っっ！か間違っでは無い…はずだ。パートナーだしなあ。

「そうか…以後気をつけろ」

「えっと…何にですか？」  
「周りを見る」

うーっす…うおっ！何そのきらきらした目！？まさかキバットのせい！？…やっちゃまった…

「なるべく、カバンに入れときます…」  
「それでいい。次はお前の自己紹介だ、早くしろ」

あつれ〜？優しいな？…まあ、いいか。とりあえず自己紹介！関羽に叩かれたくないし、

「何か変なことを考えていないか？」  
「い、いえ！何も！！」  
「なら早く自己紹介をしろ！」

怒った！？理不尽すぎるだろ…まあいいや、キバットも出してっ…

「えっと…俺の名前は久遠龍二です。それでこいつが相棒の…」  
「キバットバット三世だ！よろしくな！」  
「…」

ちよっ！何この沈黙！？まあいいや、座ろっ…

「ふん、まあいいだろう。この前のあれでお前を知らん奴のほうが少ないだろう」

千冬さ〜ん！？思い出したくないんですけど！？それとクラスの皆も納得した表情やめて！  
そんなことを考えてると、チャイムが鳴った。はふう、やっと開放さ

れる…

Kの暴走／話は全く進まない（後書き）

感想お待ちしてまーす……

## 一・夏・鈍・感

「なあ、お前確か……………久遠龍二だっけ？」

「ああ、そうだぜ？織斑一夏。…東さんから話は聞いている……………」

そんでもって休み時間に入ってボーッとしたかったのだが……………一夏に話しかけられた。めんどくさいけど、ここで無視すると印象悪くなるしな……………周りからだけどね！別に一夏に好かれても困るし……………

「えー！？お前って東さんと仲良いのか！？」

「えっと……………ああ、そうだぜ？東さんに連れられて世界を飛び回ってたんだ……………」

「それは……………何とも言えないな……………」

おまつ、その哀れみを込めた目で見るなあああ！キバットは俺の肩に乗ってるしよう……………ううつ、酷すぎる……………あ、一応転生するときにはそんな記憶なかったんだが、キバットが教えてくれた。何で知ってるのか気になったが聞かなかった……………めんどいもん♪

「ええ！？龍二君ってあの篠ノ乃博士と知り合いなの！？」

ああ、声デケー……………こつちまで聞こえてるつつの他にも色々言ってるし……………あれ？そついや箒……………いましたねえ、一夏の後ろにねえ、こつちすつごく睨んでますよー？怖い怖い……………

「あの……………一夏って呼んでいいか？」

「おう、俺も龍二って呼ばせてもらうぜ？」

「了解。んで、後ろ振り返ってみな？一夏」

「ん？……………って箒！？」

「やっと気づいたか馬鹿者！」

「ああ、君が篠ノ乃箒さん？束さんから話は聞いてるよ？」

「何！？姉さんから……………」

いや、知ってるけどね！？一応初対面だし……………まーたー目ーつきーがー恐いー！束さんの話題は止めよう。うん、俺の命がもたないや。

「ああ、俺の事は気にしないで？一夏に用があつたんでしょ？篠ノ乃さん」

「え？あ、ああ……………話がある、ついてこい」

「え、いいけどよ……………チャイム鳴るぜ？」

あ、本当だ。俺のせいかな？……………そうだな、俺のせいだ。ってか、これってさあ……………原作崩壊したね、うん。

「次の休み時間にしたらどうですかい？篠ノ乃さん」

「え？あ、ああ……………そうしろ！一夏！」

「わ、分かったよ……………」

何かアドバイスをしてみる。あ、箒がこっち見たな……………一応笑っておこう……………ただの変態に見えるだろうけど！

「（な、何なのだあいつは！いきなり笑いかけてきて！……………でも、助かったから一応礼を言つとかねばな。）久遠、ありがとう。私の事は箒と呼んでも良いぞ？」

あれ、意外と好感触！？ま、まあ、あちらから言ってきたんだし……………

「いや、いいよ。俺は箒さんの恋が実るよう応援してるだけだよ？」  
「な、ななななっ!!」  
「どうしたんだ箒？顔真っ赤じゃねえか？」

あ、一応小声でだよ？一夏なら気付かないだろうが、箒が気にするだろうし。その結果がこれだよ……箒は顔真っ赤にして棒立ちだし、一夏はいつも通りの鈍感ぶりを見せてくれた。

「箒……でいいのか、チャイムがなったぞ？早く座れよ？」  
「わ、私は恋など……え！？あ……すまん、久遠……」  
「俺のことも龍二でいい」  
「そ、そうか。龍二……昼休み、話がある……それではな」  
「え、あ……分かった」

……えつと？わたくし何か変なことしましたっけ？つかキバツト鞆に入れっ！

「嫌だね〜！」  
「お前なあ……あの鬼に叩かれてもいいのか？」  
「う、そ、それは……」  
「だったら早く入れ！織斑先生が来るまでにな！」  
「うい〜……」

ようやく入りやがった。疲れるねえ、わざわざこんな事しねえといけないのか……面倒だな。

……さて、と。授業が始まったんだが……あの、織斑君？何を頭抱えているのかな？

「織斑君？何かわからないところがありましたか？何でも質問してくださいね、私は先生ですから！」

おお、急に胸を張って！……む、胸が揺れている……！気にしてはいけないのは知っているのだが……

「あの、先生……」

「はい、何ですか？」

まさか。

「ほとんど、いや……全部分かりませえん……」

やりやがった。おいおい、織斑君よお、そりやないだろう。って……俺は束さん手伝ってたからなあ……

「ええ？ぜ、全部ですか……今の所で分からないって人はいますか？」

……

沈黙ってーのは嫌いだああ！あの入学前の必読の参考書束さんに見せたら、分かりやすく説明してくれたし……ナニコレ？役得じやないかよ。流石、神！このことも想定して！

「織斑、入学前の参考書は読んだか？」

「え、ええつと……電話帳と間違えて、捨てまし」

バシッ！

痛そうですね、ほっほっほ。この後、結局再発行して、一週間で覚えるようになったようだ。ま、俺には関係無い。

一・夏・鈍・感（後書き）

こっちの方が書きやすいのは何ででしょうか。感想お待ちしております！

## Sの罵倒／被害は俺だけ？

次の休み時間、一夏はさっさと箒に連れてかれちゃったから……暇だ。誰かと話したくても周りには人が居ない。遠巻きから俺を見てやがる……俺は珍獣か！？

「ちよつと、よろしくて？」

「ちよつとよろしくないです」

んあ？誰だっけ？……名前は……なんだっけ？セ……セ……そう  
だ！セシリア・モルモットだ！何でモルモットが俺に話しかける？  
…あ、一夏が居ないからか。

「まあ！何ですの！その態度は！私に話しかけられるだけでも、光栄なのでからそれ相応の態度というものがあるのではないですか？」

「だって…お前の事知らないしよ」

「なっ！私を知らない？セシリア・オルコットを！イギリスの代表候補生にして、入試主席のこの私を？」

「へえ…セシリア・オルコットって言うのか。さっきまでセシリア・モルモットだと思ってたよ」

「なっ！？それはあなたでしょう？なんてったって2人目の男子IS操縦者ですからね」

これって、キレティイノカナ？モルモット実験生物って事だろうな。だけど、俺には束さん居たし…そーいや、色々実験してたなあ…

「えっと…まあそうだな。束さんには色々協力してたし」

「それって、篠ノ乃博士のことですわね？」

「ああ、そうだが？んで、その代表候補生さんが、何のようだ？」  
「…本来なら私のような選ばれた人間とは、クラスを同じくすることだけでも奇跡・・・幸運なのよ？その現実をもう少し理解していただける？」

「へえ、そうなのか。ま、俺には関係ない…よな？」

また目つきが怖い。まあ、箒よりはマシだが…ん？千冬さん？あの人は神の域を超えてるだろ。

いや、真面目に。

「関係ありますわ！なぜなら、あなたと私は同じクラスですもの！」

「え、ああ…そうだったの。まったく気付かなかった…」

「まあ！あなた、自己紹介をちゃんと聞いていなかったのですか！？」

「周りの視線のせいでそんな余裕なかった…」

これは、本当だ。周りが俺と一夏のことをずっと見るから、緊張しまくってたからな。あいつもそうだろう…まあ、これで3人覚えれたな。一夏に箒に…オルコットだな。後は絡むまでわかんねえ…のほほんさんもあだ名しか分からないからな。本名を聞かねばならん。

「そんな理由になりませんわ！大体、あなた方ISについて何も知らないくせに、よくこの学園に入れましたわね。男でISを操縦できると聞いていましたから、少しくらい知的さを感じさせるかと思っていましたけど、期待外れですわね」

あ、ちょっとイラってした。まあ、こんな小物に怒っても意味無いしな、我慢。

「すまないな、よく言われるんだよ。俺って馬鹿だしな… IS に関しては別だろうけど」

「IS のことでわからないことがあれば、まあ泣いて頼まれたら教えてもよくなってよ。何せわたくし、入試で唯一教官を倒したエリート中のエリートですから」

え、無視ですか？あの、俺って束さんという凄い教師が居たんですけど。…まあ、いきなり抱きついてくるところ以外は完璧だしな、あの人。

「…え？ま、まあ機会があればな…あ、そついや俺って入試受けてないような…」

「…はい？」

「だから、入試受けてないんだよ。前日まで束さんと一緒だったし」

そうなんだよ、俺の会見という名の黒歴史の後、日本政府から電話が来て急遽入学することになったんだ。だからそんなの受ける暇なかったんだぜ？それでも、神から専用機もらったのだってそのときだし。束さんが持ってたんだがな…そういうことにしたんだろ。たぶん。

「まあ、関係ないだろう。どうせ負けてたって。俺のことだし…」

「そ、そうですね、あなたなんか勝てるわけありませんわ！」

うーん、勝てただろうけど、いちいち絡まれるのはメンドイ。っつーことで、負けたって事でいいや。

チャイムが鳴るまで、こいつは一夏を探してたな…俺の目の前で。邪魔すぎるだろ、淑女さんよ。さすがに女尊男卑のこの世でもそりゃあないんじゃないですかい？

Sの罵倒／被害は俺だけ？（後書き）

感想お待ちしています。

篠・ノ・之・第（前書き）

タイトルはおふざけです……（笑）

## 篠・ノ・之・箒

「あの、箒さん？用事って何かな？」

「そ、そのだな…何故、私が一夏の事が好きだと思ったのだ…？」  
「見たら分かるって…」

今は昼休み。さっき言われたとおり箒に連れられて屋上に来たんだが…腹減ったなあ、これだけのためにここまで連れてこられたの？俺…辛いよ？

「……」

「話ってこれだけ？まあ、任せろ。応援はしてやる」

「へ！？あ、ああ…すまないな」

「いって、束さんにも言われてるし…まあ、それは理由の一つで大きな理由は、俺なんかより周りの皆が幸せになれるように言う俺のモットーがあるからだ！」

「…は、はは…」

「わ、笑われた！？」

やべ、声に出しちゃった…相手も目丸くしてるし…けどなあ…転生前からの目標だからな。これ変えられないしい…ま、いいか。

「い、いや…すまん。私のためにそこまでしてくれるとは…」

「いっての、よし、話が済んだなら飯食いに行こうぜ！」

「え？あ、ああ…」

ど、どうしたかね？顔赤くして…あ！手つないじゃってるからか…けど、こうしないと早くいけないし…腹減ったああああ！！全力で走る！！

「全力で走っていくけどいい？答えは聞いてない！」  
「せめて聞いてくれえ！？」

Side 篠ノ乃 箒

久遠 龍二、私の手を握って食堂に向かっている男の名前だ。この男は自分の事より他人に幸せになってほしいと言った。正直、私には理解が出来なかった。

それは、自分がそういう事を考えず、ただ一夏の事を追いかけていたからだと思う。だが、こいつの一言で気づかされた。

……他人の事も、しっかり見て行かなければ行かねばならないと言っことだ。

つというより早すぎはしないか？え、まだ全力じゃない！？止めてくれえええ！！

Side 久遠 龍二

何か、箒が上の空になって何か考えている。まあ、いいのだが……

「おい、着いたぞ？」

「あ、ああ……」

「は？ど、どうした？……ってなるほどね……」

箒の目線を追っていくと……一夏が楽しそうに女子と食べているよ。あいつ、本当にダメだな……

「よし、箒。俺が何とかしてやる」

「べ、別に飯くらいは……」  
「いいっての、任せろって！」

そう言うのと一夏達に近づいていく。もちろん、手はつないだままだぞ？

「おい、隣いいか？」

「え？ああ、龍二か。いいけどよ……あ、箒もか？」

「あつたりまえだ、馬鹿。幼馴染み何だろ？話すことあるだろうが……」

「ああ、そうだな……すまないけど、どいてくれない？」

「ええ？折角織斑君の隣になれたのに？」

「すまん！お願い！」

「俺からも頼むよ、飯食う時間無くなってしまうからさあ……」  
「……………」

箒さん？すねないの。いや……けど、すねてても可愛いな。取り合えず頭なでなで。

「なっ！？何をする……！」

「あ、すまん……可愛かったからつい……………」

「わ、私がかわいい……！？」

ああー、顔赤らめちゃって。こら、その子！やってほしそうな目で見るなあああ……絶対やらねえぞ！

「頭……撫でくれたら代わってもいいよ？」

「りょーかい。ほらよ……」

「あ、ありがとう！はい、どうぞ！」

「ほら、箒空いたぞ？俺はいいから座れって」

「私が……可愛いかな……フフフ……」

「おーい……… 箒さん？」

「……… はっ！あ、ああ……… すまないな………」

箒さん……… 俺に言われて喜ぶんかい。

「ん？龍二、お前はどっするんだ？」

「そ、そっだぞ！お前はどっするんだ！」

「んー、後で席探すよ。箒、何食いたいんだ？俺が取ってくるよ。その間にお前は一夏と話しとけ」

「そこまでしてもらつと逆に困る！……… 和風定食で………」

「りょーかいつと………」

ふんふん、色々メニューがあるんだな。うーん……… 今日はおでんでいいか！天堂屋みたいに具は3つだったらいい……… わけないか。伊達さんが作ってたおでん旨そうだったなあ……… お、きたきた。

「ほれ、これだろ？」

「ん？ああ、すまん………」

「龍二……… 俺、もう飯食い終わったからここ座れよ？」

「いや、お前は箒と話せばいい。聞かれなくては俺はどっか行くぜ？箒さん？」

「……… 私のそばにいろ………」

「りょーかいつと……… ってああ！？」

「……… ど、どうした（のだ）！？」

「キバット忘れた………」

仕方ないんだ！箒が二人きりがいいって言われたし……… すぐにここに来たし……… 後で何か食わせよつと………

「ああ、あいつか？」

「そ、まあ気にすんな。お前らには関係ない」

「そうだな……」

「そうそう、んじゃ早く食うわ。それまでお前ら思い出話とかしときな？休み時間だけじゃ足りなかっただろ？」

「……これでよし。俺はゆっくり飯が食える……ん、大根旨いな！二人も仲良さそうに話しているし……良かった、良かった。これでいいんだ。俺は一生独り身だろうなあ、こんな感じじゃ。」

「ふう……」

「どうした龍二？何かあったのか？」

「箒……ありがとう。けど、心配すんな、俺は大丈夫だ。お前は自分の事に集中しな？」

「あ、ああ……助かる」

ん……なんで俺の事を気にするんだろ。まあ、いいが……

「あ、食い終わった……お前ら、教室戻るぞ？」

「え？ま、まだ私が食い終わってないぞ！」

「そうか……んじゃ、俺は待つとくから、お前は先に帰っていいぞ、一夏」

「おう、分かった……遅れるなよ？」

「はは、分かってるって！」

「……まあ、これで帰るあいつは駄目だろうな。箒さんがすごく怒ってるし。」

篠・ノ・之・第（後書き）

感想お待ちしております。

## 湧き出る殺意（前書き）

タイトルは気にしないでください。

## 涌き出る殺意

「箒………今のはすまなかった」

「………別にいい。あいつはああいう奴だからな……」

凄じ怒ってらっしゃる………確かに一夏が先に戻るのは悪いよな。  
俺が原因だけど………さて、どうすれば一夏が箒を好きになるんだ  
ろうか………

「龍二………おい龍二！」

「ふえ？………ああ、食い終わった？」

「そうだ！早く戻るぞ！」

おおっと、意外と時間経ってる……走って帰るか。箒が追い付けるか  
わからんが。

「箒、走るか………？」

「ああ、当たり前だ！」

「うおっ！待てって！」

それより先に走っていきやがった。んゝ、足速いな。まあ、それは  
おいといて……

「食べた後すぐに走っちゃいけませーん！」

~~~~~

「ああ、その前に再来週行われるクラス対抗戦に出る代表者を決め
ないといけないな」

ギリギリ授業開始には間に合った…だけど、この授業で代表を決めるらしい。まあ、俺はめんどいし…一夏がなればいいんだよ…うん。

「クラス代表者とは、対抗戦だけではなく、生徒会の開く会議や委員会への出席…まあ、クラス長だと考えてもらっていい。自薦他薦は問わない。誰か居ないか？」

「はい、織斑君を推薦します！」

「私もそれがいいと思います！」

「俺もーそれがいいなあー」

「お、俺？…って龍二！お前も俺を！」

「すまないが、お前が適任だからな…」

「他にはいないのか？いないなら無投票当選だぞ」

「じゃ、じゃあ、俺は龍二を推薦する！」

「なっ！？まあ良いけどよ…」

おうおう、俺を選ぶなんて…なんてことしてくれるんだ！これじゃ、睡眠時間が削られる可能性があるだろうがあああ！？…まあ、戦えるなら良いけどよ！

「納得いきませんわ！そのような選出は認められません！」

おお、モルモットが机叩いて立ち上がった。ついでに言うと、一夏も立ってる。…ん？俺？もちろん座ってるよ？授業中だからね！お前らそういうところはちゃんとしろよ？

「男がクラス代表なんていい恥さらしですわ！このセシリア・オルコットにそのような屈辱を一年間味わえとおっしゃるのですか！？」

ほほう、言っじゃないですか。お前なんかにはちょうど良いんじゃない

ないか？一夏が代表になるなんてな。俺？やる気無いからどうせ負けるよ。だって…本気で勝ちに行こうとすると、ハイカブ使うもん！

「いいですか！？k」

「だーめ」

「なっ！？」

「おい、龍二…」

「いいんだよ、どうせお前も限界だったんだろ？」

「あ、ああ…」

そろそろ授業始めて欲しいという視線が…数人から来てたので早く締めてほしいのだが。まあ、俺は良いんだけどな？その…だな、先生が俺をガン見してくるんだよ。それから開放されたいんだ！何で俺は睨まれねえと何ねえんだああああ！！

「（面倒だから）オルコットさんがやればいいと思います。そもそも、彼女は学年主席だと自慢してたので、彼女が適任でしょう」

「久遠、面倒だと思ってないだろうな？」

「あ、当たり前ですよ！俺は早く授業したいの、分かる？オルコットさん」

「決闘ですわ！」

「…あ？」

決闘って…勝ったら何もしないでいいの？ねえ、聞してる？

「勝った方が、クラス代表ですわ！」

「「ええー…？」」

「なっ！？受けるのですかどっちなのですか！？」

おお、一夏君と気があったではないか。よし、握手しとこ。うんう

ん、友情っていいなあ。

「…しゃーない。それが手っ取り早いな」

「おう、いいぜ。俺も受けてやるよ。四の五の言うよりわかりやすい」

「言っておきますけど、わざと負けるようなことをしたらわたくしの小間使い…いえ、奴隷にしますわよ？」

ど、奴隷？…あれですか、頭に性が付くやつですか。

「…まあ、俺は勝ちたいんでな…とりあえず戦えりゃあいい…」

「真剣勝負で手を抜くほど腐っちゃいけない…ハンデはどれくらいつける？」

「あら、早速お願いかしら？あなたもハンデが欲しいなら今のうちですわよ？」

イラッ … いや、冗談抜きであのドヤ顔は許せん。今ここで力の差を見せ付けておくべきか…？

「いや、俺がどれくらいハンデを付けたらいいのかなーって」

「…え？」「…」

「当たり前だろ？お前らが驚いてんのは、ISが使える女と使えない男の力の差についてだろうが。俺らは少なくともお前らと同位置なの…分かるか？」

「…」「…」「…」

…なんで黙るかな？殺気とか出てたかな？…千冬さんは笑わないの！その笑いは人を怖がらせる！

「ま、まあだな。俺たちだってIS使えるんだが…相手は代表候補

生だからな。一夏はどうだか知らんが唯一試験で教官倒したらしいしな…俺は殺ってないけど」

はあ、疲れた！もう当分喋りたくない！

「さて、話はまとまったな。それでは勝負は1週間後の月曜日。放課後、第3アリーナで行う。織斑とオルコット、それと久遠はそれぞれ準備しておくように。それでは授業を始める」

あつれ〜？俺がついでみたいな感じになってませんか？……………まあ、いい。今は授業に……………集……………ちゅ……………ZZZ……………

湧き出る殺意（後書き）

感想お待ちしております。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2188z/>

IS(インフィニット・ストラトス) ~何というチート人生~

2011年12月10日22時48分発行